

ささやき

編集・発行：特定医療法人 明和会 琵琶湖病院

聴覚障害者外来スタッフ

FAX：077-579-5487

TEL：077-578-2023

E-Mail：mimi@biwako.or.jp



「手話が教えてくれたこと」

西下 裕美（心理相談室 精神保健福祉士）

「心理相談室では手話に親しむためにも、朝の申し送りを手話で行っています」

私が琵琶湖病院に就職してまず最初に立ちはだかった大きな壁がこれでした。琵琶湖病院では、来院された聴覚障がい者の方が安心して適切かつ十分な医療が受けられるよう、手話が可能な医療スタッフが対応したり、受付からの呼び出し時にも工夫をしたりと、コミュニケーションによる障がいをなくすことに努めています。そのため、手話を身につけることはソーシャルワーカーという立場の私にとっても大変有意義なものであるのは間違いないのですが、なにせこれまで一度も手話にふれたことがなかったため、内心「これは大変なことになった」と非常に焦りました。就職して、業務が適切に行えるかや、うまく職場に馴染めるかより、まず先に、どのようにして手話を取得するかが一番の心配事となりました。書店に走って手話に関する本をあさったり、教育テレビで手話を扱う番組を観たりもしましたが、職場で使える「生きた手話」がなかなか身に付きません。そんな矢先、私の担当している病棟より退院支援が必要なケースがおられるとの話がありました。その方は聴覚障がいをお持ちの方でした。

ソーシャルワークで私が一番大切にしているのは、ご本人の望みや思いです。その望みや思いを中心として退院までの支援計画を考えていくのですが、そのためにはご本人と何度も面接して、退院までに何が必要か、それを取得するもしくは補う手段はあるのか、相手が本当に望んでいることは何なのかを汲み取る必要があります。聴覚障がいをお持ちの方との面接場面では、簡単な手話での挨拶の後、筆談が主なコミュニケーション手段となりました。筆談での会話というのは、文字を書いている間その間が発生し、書いた言葉を見てのやりとりになるため、あまりテンポよく会話が進みません。なにより相手の顔を見ながらの意思疎通が図れないため、私は本当に相手の真意を汲み取れているのかと、なにかもどかしいような印象を受けました。そこで再度私は知っている手話の単語をつなぎ合わせての会話に切り替えました。正確な校正の文章のやりとりよりも、不格好ですが単語をつなぎ合わせての手話での会話の方が、相手の表情や意思も捉えながら、円滑なコミュニケーションが図れると感じたのです。会話というのはただ単なる言葉のやり取りではなく、心を通わせる、思いや気持ちのやりとりであると実感しました。

私が手話にふれ始めてから約1年、まだまだ辞書は手放せませんが、患者さんや医療スタッフと手話で意思疎通できることに、大変喜びを感じています。週に1回参加している病棟での手話勉強会も楽しみのうちの一つです。このような手話にふれる機会に恵まれたことに感謝するとともに、今後も手話を通じて、ご本人やご家族さんの望む生活が送れるような支援を心がけていきたいと思えます。



時の経つのは早いもので、私が「聴覚障がい者外来」に関わり始めてから、今年で20年目を迎える。20年。頭の中で反芻すると、実に感慨深いものがある。6年かかって大学を卒業してからは、同じ職場で半年以上勤めあげることが出来なかった。あれこれ理由をつけても、堪え性がなかなかなかった。琵琶湖病院に拾ってもらって、25年になる。看護助手として初めて病棟に入った日のことを、今でもはっきり覚えている。一人の患者さんがマラソンのテレビ中継を見ながら泣いていた。緊張が一気に融け、脱力し、そして感動した。この一瞬が、堪え性のない私が同じ職場で働き続けていられる理由なのであろう。

「聴覚障がい者外来」が始まり、初めて聴覚障碍(以下、聴障と略す)のある患者さんの入院を担当した時は、本当に緊張した。コミュニケーション手段は手話だけ、という思い込みがなかなか抜けなかった。患者さんの言動や表情より、手話表現が通じているかどうかにはばかり気を取られていた。全身がガチガチになり、身構え、意思疎通どころではなかった。年が経ち、聴障患者さんのケアを重ねるうちに、身構えることが少なくなっていく。同時に、手話の学習時間も激減した。しかし、患者さんとのコミュニケーションは格段にスムーズになっていった。患者さんから教わることを覚えたからである。「手話で何」という表現を覚えてからは、そのフレーズを患者さんに浴びせ、様々な表現方法を教えてもらった。手話表現の強弱、手の位置、両手の使い分け方、添える表情など。今の私の手話表現の語彙は、殆ど患者さんに教えてもらったものである。言語の獲得の基本は真似であることを実感させられた。今は、聴障患者さんとのコミュニケーションで手話の占める割合は2割以下かもしれない、と感じている。双方の表情のキャッチボールこそが意思疎通の鍵を握っていると、個人的には思っている。本には「コミュニケーションの80パーセントは、非言語的な要素で占められている」とある。読んだ当時は、何のことかさっぱり分からなかったが、今は、その通りだと実感できる。

これから、聴障患者さんのケアを始める看護者の皆様。手話は本で勉強するより、患者さんに教えてもらって下さい。そのほうが格段に速く、確実に習得できます。それに、教わることは本当に有効なコミュニケーション手段になります。同時に、手話の呪縛からも逃れられます。

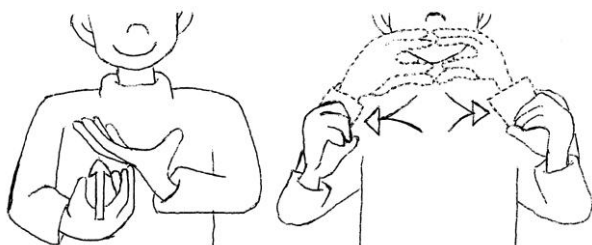
皆様、ご健闘をお祈りしております。

最近のピックアップ

- ☆ 7月13日、心理士の古賀が兵庫教育大学でゲストスピーカーとして「聴覚障害者への心理的支援」の講義を行いました。
- ☆ 7月21・22日、東京で第21回聴覚障害者精神保健研究集会が開催され、医師の藤田が「琵琶湖病院聴覚障害者外来の成果と課題」の発表を行いました。
- ☆ 9月28日、広島市で開催された第24回全国ろうあ高齢者大会研修会で、藤田が全体講演「老後の健康と医療について」と、第1分科会「高齢者の病気と早期予防法など」の助言者を務めました。

～わんぽいんと手話～

<焼いも>



全体を軽く曲げた左手のひらを上に向け、下から全指を曲げた右手で軽くたたき(「焼く」の手話)、次に両手でサツマイモの形を作る。

〔編集後記〕

すずしく過ごしやすい日も増えてきました。ということは、「食欲の秋」到来です。食べ過ぎにはご注意ください。



